

特別
36
4873
1



冷三昧

片目は思居士撰洞房語園
得ん得ん言ふ

心平片目撰語園詠芳子集
初常存新上人性朴無差處
三葉有餘如一云

大夢道人李八家名



洞房語園集上

日本堤謠

叙又

朝露醒ぬ城土も小命の物。又玉章、堀へ下りてあり
雪の雁と。皆し柳塘のひるを。東冬待乳山糸根
所。西ハ義輪橋不極る。其の程三里。元和唐
申れと。台命有て。在府の諸候家との
帷ニトイを。前後六十餘日小成就。多わとて
日本堤と云つけし。其の浮明曆丁酉の年。元の
吉原城に下る。し。新吉原と云ふ。江都
千里乃餘を引。都鄙の老若。往來者。

上

三

其人の貴氣も單騎が一と便面を翳し。陶朱の富
も徒歩カケよりして人目を惑ふ。あるは白柄ハツの
大小より扇風の摺フカあり。玉あちの一文字今ハ稀
然谷室ハ深く、亦穢ハ油し。つねも面をさす
中ヒタイハ額際モミ接あげの幾自揚す。屹キツとして素顔
あるもあつたも。前ハ京談の小唄をゆがむ。後ハ園ナリ化
の菱曲ヒテフリあり。國の人柄ハ風俗とあり。さる
くまづ也。南郭翁日本橋上のこころ。春風路上鬱
金香。比皆娛樂不知愁と作し。日本橋日本
悦。語之おもむきてうさく。西ハ富士峰。北ハ花波

折し其のまを。新米のしらぬ急な津とあり。浪
も清くとも新し。ながる足る。金龍山の入相
結鏡ハ左の耳もとらたす。徳泉寺の木魚の音も
方ハ幽く響き。浅茅潮入の木立枝顧れた。帰帆
南ハゆたか。海鳥北ハ越く。往ハ大門口斜ル見
道三曲りして又かたれも。御言札の色も
戸形カシラ驚定シごかろ寸。遊客極めて髪履を措。衣
紋カシラ刷ぬとして衣紋坂の名あり。大門口より仲の町
を見やると。入相ハ開く花あり。仲の町とあり。い
人もあはれあり。又あち人昂興イ

上

四

未^マ入^ニ仙宮^ニ觀^ル美婦^ヲ洞房^ニ先覺^フ勝^ル姮娥^ノ天成^ル翠
黛^ニ豈^ニ知^ヤ畫^ヲ元^ノ自^ラ紅顏^ニ不用^レ磋^ヲ蘭麝^ノ閨中^ニ香馥
郁^ニ梅花^ノ帳下^ニ鬢髮^ニ鬢^ニ曉來^ニ相送^ル柳塘^ノ畔^ニ夜
新郎^ノ逝^リ經過^ス

青櫻曲

望洲

百花^ノ勸^レ醉^ヲ鬱^ニ金香^ノ偏^ニ上^テ翠樓^ニ紅粉^ノ妝^ヲ况^マ復^シ行
雲^ノ春夢^ノ裏^ニ更^ニ携^テ魚酒^ヲ酌^シ清觴^ヲ

青樓聞鶻

全

泊頭^ノ花落^テ綺羅^ノ薰^ニ蜀魄^ノ鳴^キ來^テ曉色^ヲ分^ツ夢^ヲ斷^リ玳
筵^ノ銀燭^ノ淡^シ一^ノ般^ノ遙^ニ入^ル五^ノ更^ノ雲

堤上暮歸

滄洲

東風^ノ吹^キ送^リ暮春^ノ衣^ヲ西^ニ望^ム芙蓉^ノ落日^ニ微^シ堤上^ニ烟
暝^ニ晚鐘^ノ起^リ飛花^ノ片^ニ幾^ク人^ノ歸^ル

墓間觀楓樹

東里

嘗^ニ自^ラ佳人^ノ去^テ苔碑^ノ千載^ノ經^テ相尋^テ見^ル楓樹^ヲ今日
為^カ誰^カ青^シ

右道哲寺中^ニ遊女高尾^ノ塚有東里^一絶^ヲ賦^ス是也

士多^ク於^テ夢^ノ雪^ノ結^ルの^者も^誰の^也
如^クぬ^くや^むり^ふ流^ル波^も更^ニ志^ス
逸^ス志^ス

炭屋

与四郎

豊前を日本堤乃川種を其乙
玉、年を塔下、雪の雁 乾什
あゝ多や鼻紙のそふ下風 琴抱堂
那の酒醒ぬとサ多、一氣
息と其精を、胡蝶、 吳文

吉原大夫格子三十六人詩仙序

神田半入齋

容色容色舉世愛之其來尚矣和漢之先蹤何待予之言乎僕遇為旅客寄生於東都九十韶

光因日難消與親友二三輩閱華街風流之地則名吉原者是也見其細中容色絕世者謂太夫次之者踰格子有局者有散茶所其為事也終日高樓彈三絃終宵閨房歌時世薰衣裳盃軻有言不知子都姣者無目者也誠哉斯言十手指之十日視之於此無貴無賤無長無少或策肥馬或棹孤舟願一宵雙枕望殘盃冷酒嗚軋歌吹海七年夜雨如曾不知日脚沈西頻取歸路暫有闕文下遠而淡者東有筑波峨而聳西有富士業而高近而濃者前有淺原茂林

後有圓通勝地遙顧隅田川思在五中將之自

次下數行

右闕文 名寄詩仙八半入齋弟子若輩稽古ノ狂詩ナリ爰ニ

畧之

中春月夜過飲新豐墨水樓 積翠堂

高樓明月武昌陰價動千金醉色淡一片新粧嬌莫力笑臨帳下合歡衾

其二

全

蒲萄美酒翠波浮好擁紅顏賦壯游此夕寸心若相許醉中千日為君留

題戲洞房

岡田保真

新鄭江都地青樓多美人珊瑚翡翠枕錦綉鴛鴦茵懸思武藏鎗締情常陸紳朝雲雨契夜換郎親

年中雜記序

木村正阿

雪杖のけしき新を拾ひ氷を砕く茶を煎むのほろろ
坂をのぼるぬ頃より四十の下り坂よりふさふさ
ふさふさ起るまつの木の影を
ふさふさ己が隸目と笑ふ偶々とき山よりあやう

茶の位。百寮訓要内々く。西角。家生。身のし。南。を。
和名拾芥の極。を。し。き。と。唯。存。の。極。つ。く。二。階。中。補。の
ゆ。う。ぬ。搦。す。新。川。篠。山。の。河。川。を。の。つ。持。の。談。は。く。
と。し。と。そ。も。東。郊。の。翁。と。素。と。後。被。も。整。中。不。三。森。
が。夜。の。草。奴。成。駐。け。る。し。し。と。向。北。を。を。も。耐。し。は。り。寸
き。の。ち。あ。も。と。左。子。一。州。を。好。是。抱。腹。の。記。も。し。あ。下。刊
元。禄。十。有。五。年。也。と。う。う。の。素。有。と。わ。る。も。不。明。初

富士甲冑百詠序

野山百詠を可く。風騷の回志。不二小題。まる。作り。作て

叔父

且加き。う。く。予。尔。と。ふ。新。を。控。あ。つ。め。て。忍。れ。を。雪。こ。ろ。ろ。
の。河。才。あ。あ。る。も。以。風。の。意。産。け。も。く。て。是。と。と。も。り
小山。と。も。も。り。ぬ。ぬ。く。社。是。と。も。更。一。冊。を。徹。も。さ。へ。く
秀。位。里。尔。此。を。を。し。け。む。人。心。千。代。の。富士。の。う。う。ぬ
が。ち。の。仙。家。と。供。尔。壽。う。ぬ。も。新。や。太。平。の。下。尔
あり。た。い。の。時。力。三。時。の。い。ゆ。有。り。寸。口。小。一。句。は。し。記
こ。の。け。子。里。の。玉。時。か。極。り。む。し。と。う。是。誰。が。産。も。や。亦
衆。う。う。ぬ。ぬ。忘。れ。も。も。り。と。や。百。詠。集。く。彼。山。と。題。も
教。を。蒐。集。も。の。時。待。必。子。の。甲。斐。う。題。一。章。魁。也
る。ね。も。一。冊。は。不。二。甲。冑。百。詠。と。あ。つ。け。侍。る。珠。尚。河

上

九

表と一。甲斐、根柢、羨、少、て、去、も、又、去、乃
 ね、似、れ、て、後、集、を、甲、お、小、う、く、た、も、兼、不、を、歎
 ね、の、ら、く、あ、も、あ、く、と、獨、ご、ら、く、一、席、の、味、を
 有、く、彼、山、を、授、と

道恕、翁、芙蓉、吟、の、非、致、る、詠、。秀、句、嶙、峋、と、決、り、あり
 恰、も、万、里、の、佳、境、を、此、膝、の、留、り、燃、し、戸、を、出、り、く
 ち、あ、り、し、士、嶺、木、歩、ま、る、う、く、く、さ、ふ、い、さ、あ、り、く、く
 亦、も、山、来、子、一、句、の、主、あ、り、じ、り、さ、お、か、り、幸、々、
 中、の、し、も、つ、を、往、し、と、甲、斐、を、あ、る、の、し、よ、を、思、ひ、

玉、目、の、や、橋、一、ハ、不、二、の、じ、ま、い、玉、
待、必、り、
 其、裔

山、ハ、樹、あ、る、と、う、し、と、か、わ、れ、ハ、世、ハ、枝、
 の、言、を、め、り、ん、し、言、柄、イ、ハ、出、る、枝、
 有、し、立、う、も、大、き、小、き、ま、ま、く、大、ゆ、ま、く、
 三、つ、の、む、ら、う、し、も、あ、り、く、く、は、吟、ま、と、う、に
 せ、と、を、本、ま、と、ま、る、れ、

川、の、よ、み、婦、の、暗、夜、夢、か、
 溪、梁

富士、美、秋、冬、寒、四、歌、二、首、一、句、二、面

富士、晴、天、春、風、鶴、、鷓、、三、休、り、の、
霰、走、庭、
 乙、面

餅、望、
 も、ち、の、日、や、富士、よ、る、雪、の、降、わ、ら、む、
 全

その如く不二の功を歎く

云の夢や白記 扇の墨の艶 左十

富士四時吟

晴波不二の音あり山 楳 九志

水雲目や富士のこゑもけ志あり 全

目覚めあ音も存く 全

葵山乃時雨や不二月のあはれ 全

いとけい 菘や雪海苔 雪の 蘇 可然翁

蒼こと輝く 元くまをい 全

嘶を秋野も名残に 高代 全

帝子屋も併居も下戸の山り風 全

三休や不二の里もあはれ 深さ 香舟

あはれ不二の縁り子 全

雪ハ冬四季小畫や山一ツ 全

姉の如く楳ハ花より新しき 叙 叙

このまじり物もつけし 全

ひしひし不二種も出る 薄り 全

初の花ハあはれぬ日の垣根が 全

上

土

右めつ〜いものりりす付垣根を
雪子翁の垣根と稱す〜歌

影江都富士

富士見坂汗を拭の出し不
考と貞とのまうが屋賣
叙又
乾什

全

白銀の山室の〜後河町
叙又

廻板おとれ下話の初雪
乾什

影り〜雪を洗名奥津浜
叙又

虎 鰻 魚 鹽 寸
乾什

和漢誹諧ノ活法富士ニ大磯ト結ハレタリ
説文鰻ハ二魚也ト

先年吾妻の〜野小のり〜野火
為神越玉川の條を〜平林寺の境内と
思ふ砂〜原不何〜の山文法のと
岬の中〜旭ハ顔〜指拂の
杉魚の便〜幸トさ怒翁主人
る夕の橋〜加之

武花那不短起不二や 野 公
行翰卒五翁
沾洲

そ怒翁不二百後も毛登津茂て御
字一汎〜又鷹雙座〜

有は平一旬せよと云む一句まで老の要
とある句とは出さずいふもいふとありやう
さすいふ小はさしつゝいふさすいふさす
さしむさすいふさすいふさすいふさす
木ありさすいふさすいふさすいふさす
時かさすいふさすいふさすいふさす

不二見舞と棹よりさす舟 逸志

半肩菴

藤倫先生富士の詠
小かやいふさすいふさすいふさす
さすいふさすいふさすいふさす
さすいふさすいふさすいふさす
さすいふさすいふさすいふさす

後河のわさすいふさすいふさす 山田 貢橋

藤倫先生富士百詠後章曰 吞舟

自江城望之見突兀高聳位于坤維他山
諸峰擁其面前恰與兒孫羅立于白頭丈
人膝下相似 因此句綴蜂腰一絶

富岳峻嶒半入天 諸峯如子回腰邊 春風百
日吹不及積雪無山度萬年

富士四時觀 叙又

山靈何脱百花春 况亦絶頂無夏辰 古今秋
風不耐深 萬年白雪帶冬新

上

五

題不二

山口宗也

獨一崔嵬不二名。萬人眺望萬山精。古今羨
盡詩歌句。百詠誹吟更玉聲。

其二

若原八平

高出雲中雪玉寰。玲瓏形色面東關。神仙棲
止蓬萊島。最感長生不死山。

其三

全

和漢絕雙神秀精。山無向背八方明。異邦遙
仰蓬萊號。本國特尊蟬娟名。白雪高堆雲外
現。紫烟靉靄空中橫。文人騷士壯觀境。不盡

詩歌萬世鳴

掛繪不二

贊曰

鷹一乾什

山乃高と一尺亦天を去る一尺

夏雪涼 冬煙煖

山乃高と一尺亦天を去る一尺

毛唐人先尋是公家衆專晴爰

暮の雲面を包もく少一巔とんを

朝の霧腰を巻もく終平銀をさす

全躰快晴の目希あはれと上と下とん

見るとおのり右の寸方ふと

登山三日

横麓五州

吊虎心尼文

山田貢橋

富士百詠の巡狩、怒翁魔を取て誅席を移し、多敷向脇
 の卒士と出して、詞花之林を將催さしむ。是塵芥
 心を塵芥に比。ゆるき冷の句、城はゆる。唯床を
 ぬき、れ牧将に比。中も曾我のい、れ武切に比。
 孝心と信し、出されし。又予外祖の由、不あれし。
 大峰の虎の事、記せし。予不才微力にて、何を
 以て述んと辨まれし。ゆゑに、何きとを、あし
 候るや、たゞし、と何れも、筆の初を、せし。出侍る。及不
 祐成、者虎と、使し。極女、川舟の、う、以名を、あし。

天竺ハ海屋才一にて。鎌倉の清士。大峰の驛舎に
 競ひのうむの権君といへし。牡丹富貴の象、示給り
 意、試す、免す。窮多室、苦の懐、不膏、故、合、せし。祐成、外天
 下、尔、男、を、記、し。彼、兄、才、の、後、後、尔、深、衣、スライ、密、尼、の、姿、と
 なる。已、身、の、後、秋、夜、娘、の、詠、を、ば、お、て。貞、節、の、名、と、虎、
 石、小、ま、し。それ、久、四、年、の、半、是、ハ、元、禄、い、し。山、とい、一、歌
 年。外祖、入、性、新、自、得、居士。密、尼、虎、の、影、像、を、彫、刻、し。時
 言、や、者、を、海、邊、。四、信、半、の、を、起、者、一、宗、持、草、子、で。
 と、尔、あ、置、す。あ、む、り、の、歌、聖、西、行、也。之、若、野、や、奥、の、垣、を、
 昔、清、水、也。汲、む、付、れ、し。も、ち、き、清、水、を、好、り、捨、九、年、の、後、俄、者、る

上

其

道恕翁富士百吟者蓋閑居一趣向也此翁於
誹道非嗜非厭感時應節寓思於其中而已為
其句也不華不野而平易條暢而無一點客情
是則取辭達而已之義矣因此富峰句曾我兄
弟之事跡大磯虎心之不見貞烈世人之所知
也於我鄉者入性軒自得菴主不曲翁正阿齋
者誹道魁而一唱此道不絕于今七十年雖然
此等事跡於閭閻知人鮮矣漸月去星移恐其
姓名湮滅焉故附此卷後教人徧識之是此翁
愛人如此也儻幸後進之輩有志者倣此集而

撰書德義材藝傑然者而傳鄉里是道恕翁之
志也此集既成焉予亦吐一旬應要云尔

風子、知子尔云の可自留士

跋

乙酉

道恕雅翁好古人也一日閱藤子明詠富士之
詩一首慨然有感矣遂倣之綴俳詠八十餘
吟蓋不至百首者則避盈滿也句、連珠拱璧
坐、作芙蓉半天看者也其所綴蓋自春夏秋冬
花鳥風月以至五倫情態矣予謂詩言志俳不

亦然乎已而誦所詠之五倫之吟則固知不朽
之言而與富峰之雪色映照于萬古也其可以不
不賀之乎其可以不賞之乎時雅翁微笑而曰
爾試跋之而雅翁者予通家而在父行也且以
師而視之辭則乖志筆則侵禮然遂不能固辭
於是短綆汲深褚小懷大聊題寸楮云爾

右前集富士百吟之跋也其序文畧之再
書此跋者也

柔氣目錄序

市橋如見齋

三畧曰軍鐵曰柔能制剛弱能制強柔者德也
剛賊也蓋其秉柔以信而無私姦邪僻則於我
何胡有仇讎乎若及其變而作讎為敵者賊也
邪也戒以其正討之豈難之有哉予曾聞仁勝
凶邪德除不祥此謂誠可信矣于粵稱柔氣者
何哉日用彛倫之間以仁讓柔和而制治血氣
之勇而能與人交則內無可加刀劍雖外無可
動兵戈敵如此則不戰而常得勝之道也是故
以柔為體以術為用以平為常以兵為變其術

備干非常之要也。以是如今僅述其意趣而係
小序卷甲聊欲使全志輩便于此道而已

右柔氣目錄ノ序ハ先師一稿如見南ヨリ予カ祖父玄意
南ニ傳ヘ玄意是ヲ澤道智ニ傳ヘ道智ヨリ予ニ傳フル所也
此集ヲ見ル人此一序ヲ讀ニ至テ若熟得翫味スルアラ
ハ大イナルハ國ニ利ラニカ小キナル其身ニ益可有予此一序
ニ於テ更ニ謙退辭讓スルナシ是先師如見南柔氣一流
之濫觴ニシテ自ノ作文ニアラサレ也僕傳之テ秘藏スル
久シ昔宋人ノ燕石ヲ愛セシトハ其趣意殊ニ異也

飛流錦序

引涼亭

子石

待筆筆く花遠一。方尔七父身はく生々之

とて七用まじひぬ。志まのうびと青傘の下小規也
鳴し。この乃は手向中と摘人と寸。照り哉手尔多
たつて。文字能く心象の一句明。自甲小。雞犬
時をうまに夜を守。螢火惠光と照る寸。散花を
たつて。瓊瑛掃とまじひ。気化の多う花と。分ちま
くの其智あまぬとつあり明。まじり人あか。の中小
訓語好ま。句の中尔子石あり。磨い玉もあま。あま
やと。多と集時とまじひ。漸一句と得ま。とらあへ
寸と父のい姉ま。為尔。身の句と並く。先記
天也。外己脇より。讀よと有。但せ。秋と鄰へ

丸餅く。寸志と志。牌前ふりけを李奴

享保十三年申七月

名の如素清ののちも一葉多
漸乾きうふ 故^{故人}子石
後^後子石

右飛流孫退善のホリ凡る百餘心男之

那ちくしれ華や手向の夕る所
子^{子石女}花好

同集跋

乾什

必の如素清ののちも一葉多と句沈の物我まちくを
林流井ホ一葉うかた放下く。散て信し一治定
のてホも是凡る樹ホ非を七肉の今小むて好物の
身仙と手向。手揚の某今の子右と懸眉と信し

石橋序

弟の事、油断をうら。あるをて好もしく者
つゝを中かち形も。ほまけくとほは口爾ましく
友の床る川の屯。以経頂。お、秋の物るく。夏とそ

上

三

ねまね守。取巻火のそくも煙とあつて消すは詠
尺よかき。封して後さねぬ。いそとなき秋もさく。何の
も明く老ハ考ふるを強てあ。雪の程もあをさりと悦ハ
とくも善ぬ。まうへる妻ハいそくしてねをけり
その。忽ちを季とまの裏へく寸嵐とる半侍。冬乃
の風もくつもの也。丈砌ハ千隙もあ多袖の多れあ
つてもう侍り。ふと里の生く。去置——一封と開く
亦唯妙子の一向と起る。汎河乾史多悟耶尔。是志実の
辞せし極樂のいそくをき。まの縁の富喜草。家業
の傳受もの也。まうへる志はさのつまねに。一とく

平をけしと海へまうの冊をを。あね也只家の指と
きつひ。ゆるをあね人の里の出草もあ。まうね
まうね

物屋うと酒を妙子乃柳と如宮 尾清

追悼

平のいそくも洞也 真 如 露 丘口

右追善ホク五十余吟畧之

改

鷹一乾什

以前ノ尾流といふ有。鼓杖捲行。その世を睡る。此の
尾流ハ、茶お掻き。形くあり。そ又とあり。尾流を
酒と書し。くうをぬ。うく掻い。結書し。き。あね。こ
結舞。け。地。き。あ。出。遊。之。味。門。あ。め。き。満。入
い。い。金。の。富。人。せ。

橋梓園序

来爾

八月九月。ふ。海。さ。に。も。き。夜。
千。声。万。色。の。

か。後。小。打。あ。る。く。く。い。お。た。た。二。十。三。之。因。の。秋。も。と。や
あ。る。く。く。い。の。地。を。こ。み。こ。何。も。似。方。あ。ら。う。れ
付。き。く。ま。く。と。く。あ。い。毎。日。か。さ。い。の。は。く。り。類。を
将。か。十。と。さ。さ。い。い。い。い。も。地。は。さ。い。の。如。妙。川。ハ
か。と。あ。い。四。十。と。四。を。十。八。枚。の。沼。子。満。れ。ハ。か。さ。分
の。理。と。あ。い。減。り。枯。木。淡。般。あ。ま。ま。多。多。真。如。い。れ
一。悟。不。明。の。利。便。か。借。物。寸。の。美。が。あ。ら。う。の。天。馬。帽子
就。あ。う。く。そ。う。後。待。待。の。因。縁。い。い。い。七。又。親。友
の。玉。什。と。乞。く。好。物。の。句。葉。地。調。一。汎。結。く。傳。あ。る
了。新。子。載。と。い。い。く。右。方。に。あ。ら。う。ま。い。く。

あはれわ。人のかゝるみのうら衣。もときゆ紀と打
ち〜〜〜舞

か連夜の目下の門と子彦も
葛の多やま留双成の恋一風
若いの一あや衣の玉結見
一まんとか成結あや力お一
心雀やををせし〜の下の下
おまを〜おまをぬのも連続うを

来示
来几
萬釜
才央
龍睡
来夫

右邊善ホク六十條以畧之
亡父撰集品類

曉拿抄六冊カ枕の曙抄を河府
艶悟よ福〜の〜を先師其角翁の
わ〜き寸曉拿を買せ〜の〜唱も
〜の〜や〜の〜入目乃面新又
袖の上よ〜く〜二あ〜
張く〜て山海の〜を拵ひ〜
二人〜る〜
破〜〜〜
音山

不曲翁雪荷翁古来亦叟四世の誹諧を
この来示るは緒

跋也

乾什

雪荷翁古来雨之伯父ニシテ養父也吾同邑ニ誹諧ノ絶
サリニ此翁是ヲ嗜ミテ故也右ニ鷹叟之跋ニ載ラレシヨリ
心ヲテ雪荷翁ノ一句ヲ書左為追福

酒

雪荷

ゆるるる惠遠るる争うる花の暮

くく頭巾を揚のとく玉 叙又

雪荷之弟子警者

ひめあまやけスシありと點取ウナツりき

朝四

追福三序引

叙又

後の子石之飛流錦。丘口石橋。今の来示之橋梓園の
身之作文と撰あまね。三子各亡父の為小追福
漸一句一序おまをるの趣で。弟をみる恩の報を及
かめてまゐりの淨力や。誰か是を空文といふは
そ存心の殺滅するの誹諧。此まゝ作文とあつて
つあのは。とや其双親の在ありアル。其父の在あり
そ母の在あり。そのあつてこそ。保始とくして
本心。そのあつて。日月もあつて。あまね月と
おま。そのあつて。あまね月と。其あまね月と

上

其

西舟人しりあり。やちつちの土佐に。調子のきねぬ
踊うとま。四目の中法十日も芥の柄の短く。日暮まで
ふる角もあけゆる。と宵もさるる南守ととつね。わ
帰ねもあぬも尾とやしく。さるるもあり。さるる
花女いなりメもあくさちめお花のあま。あふ。又の郎
をまに。あくとあつ月をさるるしあし。お花ハル日
の約束とあんぐん杯し。二ハル杯。花袖ハル風のもも
以。さあは。是ハル貴し。さるる。種。さるるのこも
と。して。あら。暇さ。さるるもあり。凡。艶。麗。を。お。靡。
さるる。進。退。さ。る。鼓。を。度。と。金。の。魔。と。さる

振で。一。夜。花。さ。ち。さ。る。と。花。車。と。ま。
不。思。い。判。ま。さ。る。女。方。緒。さ。さ。る。是。百。數。百
中。の上。策。し。和。氣。の。大。臣。通。者。宗。傳。の。一。卷。絶。意。本。記
も。元。山。の。自。れ。産。今。東。郊。待。乳。山。の。襟。不。然。尔
妙。法。の。一。を。嘉。遁。寸。あ。さ。ち。老。莊。の。無。為。も。修。養
孔。孟。れ。正。常。も。不。屈。朱。尔。の。一。の。語。の。と。さ
二。六。時。中。道。哲。意。場。の。敷。証。ハ。爾。和。會。と。経。魚。居。
唱。あ。し。日。深。の。佛。名。急。い。ん。寛。文。の。頃。鶴。谷。狂。言。屋
組。あ。り。い。男。彦。の。唱。の。ま。あ。り。土。も。あ。り。と

此次下敷行
の文有畧之

上

七

叶いぬ彦の端を記。身不新くくくくく
を待てをわく先。一日女郎揚ちりそ。盃乃
出ると黙然とて。鏡手盃とちり家内所
時。いつのんで女郎木内。女ら盃とけ持し
子細くくくく。取者とさき。扇直
千秋葉葉の千菊に玉とまはくくくく
く。神妙をよみ家内も。家外の家とさき
右初心の家小多初半也。客客とて時。亭長又
女家とさき。次小紋日の約束と変ぐ。或ハ新艘神
の催し。おかし腹まゝ退き。おかし。おかし。

もあつて。あるとて。一偏小内。茶の
度。半可の智重とて。仕奉の人。吉原。経
女方。茶一。て。婿傳の贅。も。おかし。おかし。
い。新屋位。乃。美。おかし。の物。おかし。おかし。
半。頼。抄。これ。おかし。の贅。おかし。おかし。
い。おかし。おかし。おかし。おかし。おかし。
か。盃。之。及。が。口。上。おかし。おかし。おかし。
金。の。ま。つ。つ。おかし。おかし。おかし。おかし。
おかし。おかし。一。廟。興。おかし。おかし。おかし。
おかし。おかし。おかし。おかし。おかし。おかし。
おかし。おかし。おかし。おかし。おかし。おかし。

上

廿一

ソナ中、張知さう。ウツカリとまふらひぬあはれ
地の高ありし。一げあふ。自の爲る其の
生誕帳箱の奴、銭箱の者とも
終るは。是、枝葉あふりし。彼海民、説と志
艶靡と靡し、あふも。唯金銀と播ちし
花車、小思。牛速小走。牛
勿論の半。未熟成あふ。凡金銀の光
何ぼ花車と牛とあはれしや。走る、案門
の智識。走る、下し、播ちる。僕も走
せし。彼海民、この化。やむもギウも。
澤氏 牛字

ヲ用_ニ非也及_ノ字_ニ但_ニ
花車_ニ對_シメ_テ牛_モ因_リ三_{アリ}
武陽吉原の女房の張といふ。惟金銀と播ち
きりまて。行へし。自由あふぬあり。其樂物と
さし。然_ル知_ル者_ノ多_ク播_チ玉_ト。辯_ノ及_テあ
ね。ま。可_シの老_シけり。あ、僕_ノと
三車駒丸のまふらひあはれし。古流のあは
そのまふらひ。為風の犬やがあはれし。亦又問、京
粹といふ。関東小通といふ。其、翁のありあは
趣、者の申_ル。者、_{イニ}ヤキ。定木も成_シ金_ト。は、れ
り。人あはれし。翁の曰、下とはあはれし。人皆、放_シ

上

世

情棄の様と云へば、
天下のこのあつて、
あつては、
いさゝか、
つゝ、
字に、
情と、
一、
類、
好色、

好色の様をあらはす。年長、
あつては、
の、
可、
あり、
あつては、
二、
と、
あり、
も、

後少似りたる。多山きくはく我。平もおびつる
まの酒。且ほの且語り
日黄昏ふ向く。好く帰らむ。時一声
の能く。声の翁。尔。数自と乞。染。声と。答。海も
し

君命や、亦も、あぬ、向く、は、よす

土と婦、一、定文の、は、わ、つ、う、巷、身

醉翁作

か、は、之、お、の、子、原、く、は、君、標、と、思、つ、ま、う、か
玉の、こ、も、き、わ、ら、つ、で、こ、も、は、く、の、名、目、と、し、

ち、ね、あ、ら、わ、ち、い、や、ま、あ、ら、い

○、何、も、こ、の、ま、も、い、ま、い、

ま、ら、ま、あ、ゆ、り、ま、は、ら、ま、吉、務、の

心、を、か、つ、く、い、ら、い、ま、の、れ

餅徳頌並序

臯平砂

古昔劉伯倫酒徳頌者任自分一人之機嫌
而顯捧鱗之意味止乎如何尔毛有其時之
仔細而盡過當之詞共相手捕世上之下戸

上

世

而非捲管與耶往矣卯之年也梟或人作酒
餅問答而詰餅食者止乎則予毛不忍折節
之壯氣頻綴餅德頌而及紙上之論義止辱
今又對此集之酒德而得饗_{タリモスス}恕叟之幸因_テ
刊_カ舊文之_カ僕而添_フ新規之味者也其頌曰_ク

夫安めつちのうらみ深く。字賀の神乃おもあまあやそ
うなるものゆるあまのむ人の命乃根をつちて。ゆねと
を是をさるる我にあれをよまといへるも其用をさして
和訓の自由_{ミトコト}あむべき子。こめと、日々の事_{ミトコト}あはして

ハ木を武家の謎文あらなりあはる中其類を同し
其品を異にして。標_{モトコメ}同_ト標_トといへる種_シあはるいへる軽重
のわりあはるるもあはるる。其もあはるる。あはるる其名と
いへる用といへる。そのれをあらくといへる捲_マよあはるる
扱_サ人工のかいこまあり。標と白との働_ハあはるる。天成の
風味をあらくする。春_{ツキ}人_テの白_コの度_シあはるる。あはるるを思へ
る。そのれを標の先_ハあはるる。あはるるをまゝして。一動
一静の通_カをあらくする。陰陽のまゝいへる。あはるる。あはるる。
煉_レ加減_ハ人の和_ハあはるる。あはるる。あはるる。あはるる。あはるる。
一年の行事_ハあはるる。あはるる。あはるる。あはるる。あはるる。あはるる。
神_ハあはるる。あはるる。あはるる。あはるる。あはるる。あはるる。

上

世

生棟上のともあき。年忌の志し。花月雪の折
あつれて人をあつれし。又多し。朝
茶の粉れあきやふ。晩の煎地あきやふ。げちるふ。
時の変化尔自在なけむや。あるる幸甘の味を借
り。何ふ丹靑の色深なり。都鄙尔清の名枝
何しそむを声し。旅人をさ免。そよあり
膳櫃の値もるけむ。二指尔曲を栄して。鞍上の
綴を養ふ多む。あつて百理の糧ありとそ。
是と噂むし。志のあきやふ。かく感しそ。
生れあつて。かゝる物。これの皮を剥けて。茶魁

者の譬とあるも。又いふ。此を續を投て。右に
たつ。ゆるも。心の様乃貪ムサホリとあつぬ枝。又ゆるむ。
此の口なきふ。三尻もちの名おつけとそ。そ
まの枝やむ。む。は。耳をたて。む。け
て。身を投ふ。よ。よ。あて。実。い。の。き。よ。あ。さ。る。人。
人の親乃る。む。ま。む。む。の。赤。紈。子の。あ。は。さ。り
む。む。の。推。も。ち。の。あ。い。や。ま。じ。た。キ。身。も。粉。と。あ。さ。り
あ。ち。も。む。生。に。記。の。存。不。顧。れ。も。あ。ら。も。良。茶
の。苦。み。や。こ。金。は。必。の。つ。か。り。あ。ら。も。良。茶。は。し。地
が。を。む。け。ね。む。古。今。一。道。の。達人。あ。つ。て。か。こ。ふ

雜煮百切の旨味を乞ひねる。あうと揚枝ぎの
事さし。ぬ度の名譽を伺はれて。勝負ハ人
斬しての程いなるを。稽居をさし。ひひるを
も。乱れぬ所のあまふ有なれた。稽居くの
友とけく。思ふに其敷の積ふ有る。やうそ身體
悠遠して。孝白一斗も盧全の七碗を。道
通も海をやし。とせ。う。の睡夢の境入て。
百年の是非をうまきて。何れ沈酔の飲樂
亦能く。け。ひ。ひ。阿房宮の下。下。
い。る。騎武者の勲。く。く。く。下戸の

名目ある。あ。あ。一人の好者ある。雜炊の柱
牙ま。焼るを。腰も押あて。あ。あ。あ。あ。
強。負。守。それよ。今。今。今。今。
か。か。か。か。か。か。か。か。
料。料。料。料。料。料。料。料。
醒。醒。醒。醒。醒。醒。醒。醒。
て。の。の。の。の。の。の。の。の。
面。面。面。面。面。面。面。面。

酒徳説

叙又

身下ル盃を奉^ル影多^ク影^シて二人とあるとき。若白翁
獨酌の妙作也。闇夜^ニ盃を傾^ケ。但念^ハ荒野を約
制^ス。己^ハ己^ノ人^ト。野村^ノ言^ハ。蓋^ハ酒^ハ。腹^中の甲冑^ト
と。老^ハ父^ト。淨^ハ應^ニ。又^ハ予^ハ。刑^ハ。蓋^ハ酒^ハ。腹^中の甲冑^ト
酒^ハの^ハ。尚^ハ。者^ハ。杖^ヲ。結^ハ酒^ハの^ハ。者^ハ。定^ス
む。瘴^ハ氣^ヲを^ハ。拂^ハ。濕^ヲを^ハ。辟^シ。暑^ヲを^ハ。け^テ。室^ヲ。掃^ハ。せ^ム
是^ハ。昔^ノの^ハ。切^ハ徳^ト。後^ハ。尔^ハ。言^ハを^ハ。養^ハ。及^ハ。び^ハ。九^ノ損^ト
一^ノ徳^ト。あ^ハ。り^ハ。差^ハ。い^ハ。の^ハ。者^ハ。有^ル。下^ハ。戸^ノ。衆^ト。一^ノ。下^ハ。戸^ノ。の^ハ。愚^ト
老^ハの^ハ。語^ハ。の^ハ。淨^ハ。談^ト也。淨^ハ。應^ニ。當^テ。つ^ハ。い^ハ。の^ハ。あり^ト。

大盃斗酒をの^リて。不^レ醉^シて。酒^ノの^ハ。切^ハ徳^ヲを^ハ
あ^ハ。り^ハ。有^ル。人^ト。は^ハ。徒^ニ。酒^ヲを^ハ。食^ハ。下^ハ。戸^ノ。の^ハ。小^ハ。盃^ト。漸^ニ
を^ハ。分^ハ。と^リ。け^テ。た^ハ。の^ハ。一^ノ。盃^ト。蓋^ヲを^ハ。飲^ハ。で^ハ。も^ハ。切^ハ。を^ハ
知^ル。人^ハ。は^ハ。盃^ヲ。蓋^ヲ。の^ハ。上^ハ。戸^ノ。と^リ。予^ハ。私^ニ。確^ニ。漏^レ。と^リ。良^ハ。將^ト
酒^ヲを^ハ。用^ハ。い^ハ。の^ハ。勇^ハ。士^ト。者^ト。星^ヲを^ハ。賞^ハ。寸^ハ。人^ト。深^ハ。小^ハ。お^ハ。お^ハ。て^ハ。結^ハ
和^ハ。一^ノ。結^ハ。祝^ハ。し^ハ。む^ハ。い^ハ。つ^ハ。れ^ハ。の^ハ。物^ハ。酒^ハ。小^ハ。と^リ。じ^ハ。や^ハ。不^レ。賞^ス
下^ハ。戸^ノ。の^ハ。事^ト。

山田淨有齋 江戸町子位平生 酒ヲ樂メリ 旦夕^ヲ。盃^ヲ。中^ニ。
不^レ。對^シ。肉^ノ。の^ハ。二^ノ。字^ヲ。を^ハ。書^キ。い^ハ。り^ハ。酌^ス。と^リ。人^ト。と^リ。有^ル
の^ハ。句^ハ。れ^ハ。さ^ハ。し^ハ。も^ハ。片^ハ。差^ヲ。を^ハ。香^ハ。詩^ハ。ハ^ハ。身^ヲ。徘徊^ス。我^ハ。舞^ハ。ハ^ハ

上

世

身後机醒る時ハ交歡を回くきくくくくハ向
を以ヒ一ハ米ノ不レ酒ヲをテ好シめりル
鏡池ノ辞ヲ作リシ其乙
七父ノ為對月集ヲ作
ル其一卷
今ニ在泉子之曰揚屋町泉屋酒ハ詩をツル
ハ
唐人ノ小云ちる人ハ我乃ハトツト出雲の言
ハハ丘のハ谷ハ芳正マシハ岐の大地を釣多ハハ
ト是又酒のハさりをのんんマシり縣升見曰江戸町二下
古今ノ大酒外科吉永升菴弟子三味線ノ上平淺茅ヶ原
心月菴ニテ大師河原甚哲ト酒戦勝券ナシ米穀の家上
ちる日の本不務るハハハハ上の米ヲ作ハ伊丹
有者の美酒の味ハ異國の上戸ハ知ハハハ中ハハ
の濁酒不嗜ハ人ノ名ハ呼ビ唐ノ清酒ハ芳マシリ

東海道の宿もつれホ雲助とハあり也。其ノイ
濁酒をハ好シムハ杉ノ葉乃本ホシキあり
蘆生の後をテ斗ハハハ。常任世万を愛中でハ
とハ。今更尔愛の言とモ悟リ得ルとハ。一ノ其の言ハ斗
一トセハ酒ニヒタリテ過シテキ 風前雲助
此世ハ醒テ夢ニズ有ケル
百とをハ花ハもハるテらリテ此世ハ蝶の後ヲ舞ヒ
あらる所とハ古款の言をハ信シズカクモ口モあらみ
々ハあらる錢のあらハ酒ハ入レあら。錢ハあらなシキモ
新を肯重あら。明日の机を舞ハも思ハレ。勿論の

以の志海を院とく易くす。其の古物に於ては、
その通を能く之を成す。其の古物に於ては、
其の通を能く之を成す。

一 善くして其の古物に於ては、

道德著しき進

白扁山白芍薬赤

星凍良嘉樂先生

通文院採りて酒を

自日 亦林五言助

又観る借りて酒を

心もやしく美哉きもの酒を
冠鞠より美酒とて賜りぬを
手も暖くあつりあつり
榎小島の金ぬき酒を
酒をとりて酒を
酒をとりて酒を
酒をとりて酒を

酒をとりて酒を

老鼠肝

鼠肝翁右の句に比し一意味に
さうのよき一 手も暖くあつりあつり
上戸自情落の解として美酒を酒を

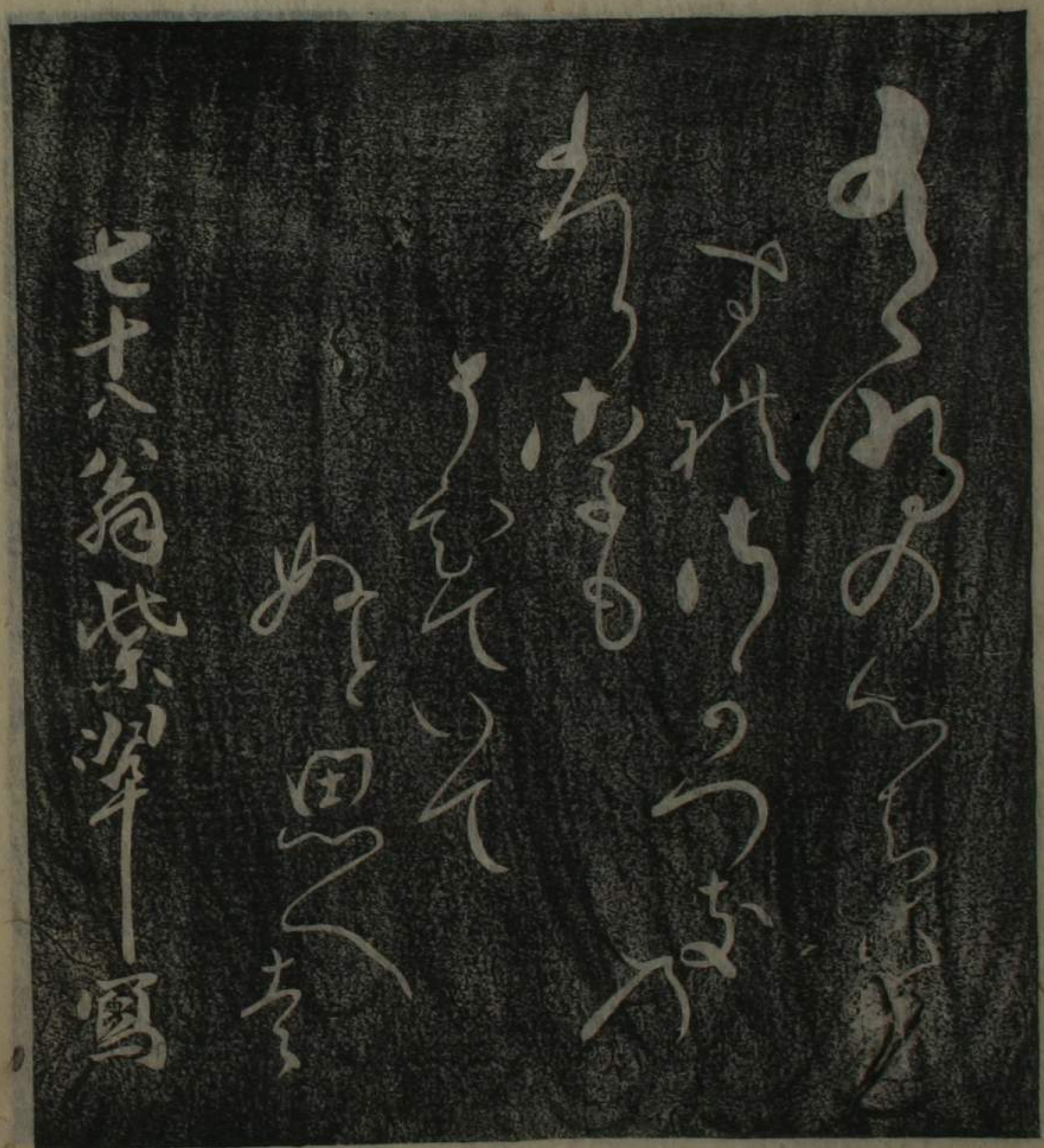
叙又

世に守頼を授けりては飯櫃を福として
 是を失ふ事過は下下りて酒を
 料する何の好むものありては
 翁昂然として嘆息は何と云ふ
 る如吾酒を嗜むは後いり口不甘ひ腹不
 満しむるを是れを付飲中不修
 と醒不飲亦多と結う蓬唐の美酒は
 併く是を果て熟睡し覺てはむるを
 飯櫃を和しく悦ぶ是全体美酒を
 誇る也區々下下性の以露を荷する上戸
 の巨林を測るるを是れと劫破一應せし
 返星の一向をかく野路は又向星は陶潜
 之素琴を抚しといつるは翁の曰可

菜のあ上母苑之
 所献言自稍
 法是くい美あ
 之可傳頌甚
 美

乾山
 尚古全

上
 四二



七十八、為茶翠一寫

六論行義曰凡^レ人未^レ吃酒時就是克惡的人也
還有些顧忌只那兩鍾孽水下肚就是天不怕
地不怕大呼小叫胡行亂作一切闖禍的事都
做將出來所以貪酒之人最易壞事上以可慎

洞房語園上終



11

卷之三

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五


九十六

九十七

九十八

九十九

一百


 丁巳年
 丁巳年

